

平成29年10月3日

地域密着型サービス運営推進会議報告書兼議事要旨

厚生労働省令第34号（平成18年3月14日）第108条の規定に基づき、平成29年9月25日に運営推進会議を開催したので、その記録を作成し、これを公表します。

千葉県長生郡白子町幸治3079番地3
設置主体) 株式会社 相生
代表者) 代表取締役 萩原 将之

事業主体及び組織の概要

(介護保険事業所番号)

1275900213

(施設種類及び名称)

グループホーム ゆうなぎ九十九里

管理者兼ホーム長 小川 功一

※ホーム長は当社職制

(事業主体)

〒299-4216

(本店所在地) 千葉県長生郡白子町幸治3079番地3

(商号) 株式会社 相生 (かぶしきがいしゃそうせい)

(代表者) 代表取締役 萩原 将之

電話0475(36)5711 FAX0475(36)5712

(所在地)

〒283-0102

千葉県山武郡九十九里町小関2316番地1

電話0475(70)7333 FAX0475(70)7335

(開設年月日及びユニット数と利用定員)

平成17年10月 1日 1ユニット・利用定員9人(一番館)

平成23年 4月 1日 1ユニット・利用定員9人(二番館)

運営推進会議の概要

日 時：平成29年9月25日 13時30分から14時30分

会 場：当ホーム一番館の畳ルームにて

出席者：運営推進会議の構成

当ホーム

- ・ 代表取締役 萩原 将之（設置主体代表者）
- ・ 管理者兼ホーム長 小川 功一（一番館担当、介護支援専門員）
- ・ 計画作成担当者 内山 貴司（二番館担当、介護支援専門員）

委員

- ・ 地 域 住 民 3名（近隣の住民）
- ・ 当 町 健 康 福 祉 課 1名（介護保険所管課）
- ・ 当町地域包括支援センター 1名
- ・ ちどりの会（ボランティア団体） 2名

（議題）

1. 入居者情報
2. ゆうなぎかわら版の内容について
3. 認知症サポーター養成講座への参加などについて
4. 委員と意見交換

(議事要旨)

前回の運営推進会議（7月31日）から今日までの施設や入居者の様子について、説明を行う。また、『ゆうなぎかわら版8月号、9月号』の解説。最後に管理者の小川より、入居者の様子などについて伝える。

1. 入居者情報 平成29年9月25日現在

一番館：男性3名 女性6名 小計9名

二番館：男性6名 女性3名 小計9名

計18名・うち九十九里町内の入居者は12名

前回の会議と同様に、パソコンを用いて集計をしたデータを基にして、説明を行う。

内山)「利用者年齢層×要介護度」の表を見ると、要介護4の80歳～84才の年齢区分の方が、最も多いことが分かる。また、「保険者×要介護度」の表においても、要介護4の方が最も多い。保険者においては、九十九里町が12人と最も多い。要介護4であっても、寝たきりというわけではなく、自立歩行もでき、食事も自分で摂れる人もいる。介護度は、あくまでも「日常生活で、どれだけ他者の手助けを必要とするか」の目安となるものである。今回の表では、平均介護度は算出していない。また、現在両館とも満床の状態である。

2. ゆうなぎかわら版の内容について

今回は8月号と9月号内容について説明を行う。

内山) 8月号と9月号とも、室内での様子を撮影している。8月号の1枚目では、おやつ時などに撮影したものである。2枚目の上段は、土用の丑の日の食事の様子を撮影したものである。中段の花火の写真は、当町での「ふるさと祭り」の日に、居室から撮影したものである。当日、私は二番館の夜勤の業務であったため、入居者の方々に20時頃に花火があることを伝え、居室から鑑賞ができるように対応をしていた。しかし時間になると、2～3名の方以外休まれてしまうという状態であった。起きていた方々は、各居室から花火を楽しまれていた。

小川) 今の内山の説明について、補足をする。当日一番館では、庭に椅子を出して、数名の入居者と花火の鑑賞をした。花火が始まった時には、楽しまれている様子であった。しかし数分もすると、集中できなくなり、居室に戻る方もでてきたため、外にいたのは短時間であったように思う。入居者にとっては、

集中して何かをすることは困難な面もあるが、数分でも花火を楽しんでいただけたということは、よかったのではないかと思われる。

内山) 9月号の1枚目では、8月号と同様に、おやつ時などの様子を撮影している。また、8月号と9月号の最後に誕生日の方の写真を載せている。

《具体的な最近の事例の説明》

小川) 「外に行きたい」という訴えの強い方がおり、ひとりで外に出てしまわれる方もいる。暑い中でもある程度の時間を過ごすことができ、歩くことができる場所をと考え、カインズ・ホームへ出かけた。今後は、このように、空調があって、広々としており、すぐに見通せるような商業施設等、外出の機会を設けるのもよいのではないかと考えている。反省点としては、入居者と一緒に何かを作業をするということが減少してきていることである。

3. 認知症サポーター養成講座への参加などについて

内山) 8月24日と25日に当町の小学生を対象とした、地域包括支援センター主催の「認知症サポーター養成講座」に、小川と内山がスタッフとして参加をした。講師は「認知症とは何か」について、紙芝居や本の朗読、DVD鑑賞等で講義を進めた。私が学生の頃には、このような学習の機会も、今よりも少なかったように思う。認知症への理解が進む社会が求められていることの証左だと思う。

小川) 認知症サポーターとは、特別難しいことをするわけではない。「地域の中で認知症の人がいたら、このように支えていきましょう」という考えを学び、自分にできる範囲で実践していく人のことである。

《講座(8月25日)に当ホームの入居者が参加した件》

小川) 最近入居された二番館の男性であるが、入居前、おひとりで生活をされていた。入居後「家が心配、服はどうなっている？」と不安を訴え、「家に帰る」との発言が何度かあった。ひとり暮らしをしていた高齢者には、よく見られることである。当日の朝、2階の居室から、自分でテレビを運ばれていた。不穏な状態であり、帰宅されようとしていた。理由を尋ねると、職員の声かけに対して怒っている様子であった。気分転換も兼ねて、養成講座の会場へ同行をしていただいた。認知症の方を知らない場所に連れて行くと、混乱を来すこともあるため、私自身同行については、少し不安な要素もあった。しかし子供達と接しているうちに、表情も穏やかに変化し、職員の手伝いをしてくださることもあった。自分が今まで考えていた以上に入居者には、もっと様々なことができるのではないかと思う出来事であった。入居者の社会参加という意味でも、参加していただいてよかったのではないかと思う。また今回のような事例は、職員との信頼関係の構築がうかがわれ、可能であったかと思われる。

4. 委員と意見交換

委員) 全員でレクリエーションなどを行う時間は、設けていないのか？

小川) 現在、個別での対応が多い。例えば先ほどの事例で考えると、「家に帰る」という訴えがある入居者に対して、話を聞くことや気分転換を兼ねてのドライブなどに行くことも、レクリエーションと言えるのではないかと考えている。毎日、決まった時間に職員とドライブに行く方もいる。また（レクリエーションとは離れるが）、職員の説明に5分程で納得をされる方もいれば、30分程繰り返す方もいる。同様の訴えであっても、ひとりひとり対応の方法も違うため、結果として個別での対応が増えてきているのが、現状である。

委員) 千葉県は他県と比較して、高齢者の人口が多いと聞く。当町で他の地域と比較して、「ここが良い」という特色のようなものができればと思う。

委員) 当町は、高齢化率は高いが、要介護の方は少ないという現状があり、比較的元気な高齢者が多いのが特徴である。

委員) 最近では、近隣住民同士の声かけ「最近の調子はどうですか？」など、お互いのことを気遣うなど、あまり見られなくなっているように感じる。昔からの隣近所とのつながりも、高齢者の精神的な支えになり、重要な要素になるのではないかと思う。

最後に次回の運営推進会議の開催日を平成29年11月27日の13時30分から予定していることを伝え、会議を終了する。

本件のお問合せ先

グループホーム ゆうなぎ九十九里

管理者兼ホーム長 小川 功一

電話 0475-70-7333